

論文

長岡高専における英語多読実践 プロジェクト (その2) — 英文の読み方に関する調査を中心に —

土田 泰子¹・大湊 佳宏²・占部 昌蔵³

大森 理聡⁴・米崎 啓和⁵・市村 勝己⁶

- ¹ 一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, National Institute of Technology, Nagaoka College)
² 一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, National Institute of Technology, Nagaoka College)
³ 一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, National Institute of Technology, Nagaoka College)
⁴ 一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, National Institute of Technology, Nagaoka College)
⁵ 一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, National Institute of Technology, Nagaoka College)
⁶ 一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, National Institute of Technology, Nagaoka College)

Incorporating Extensive Reading in the English Language Curriculum
at National Institute of Technology, Nagaoka College
- Research Reports Focused on Learners' Way of Reading -

Yasuko TSUCHIDA¹, Yoshihiro OMINATO², Shozo URABE³,
Michiaki OMORI⁴, Hirokazu YONEZAKI⁵ and Katsumi ICHIMURA⁶

Abstract

In National Institute of Technology, Nagaoka College, extensive reading has been introduced into English education since 2008. From the progress of their TOEIC Bridge Test score, it can be said that students' abilities of reading have been becoming improved. In order to obtain the reason why such change has been brought to them, we conducted the research about the way of students' reading and it revealed that most of the students, regardless of their test score, commonly take approach to understanding the context with the help of illustration and their imagination.

Key Words : *extensive reading, curriculum development, learner autonomy*

1. はじめに

長岡高専では平成 20 年度より英語多読を導入し、読解クラスを中心に授業内で実施している。平成 21 年の長岡高専研究紀要では「長岡高専における英語多読実践プロジェクト (その1)」として報告

を行った¹⁾。ここではその後実施された英語多読授業の様子と、学習者の「読み方」に関する調査に基づいて議論する。

2. 背景

年々高まる高専生への英語能力の向上という要求に対応するため、学生のリーディング能力の向上を目的として英語多読が多くの高専で導入されている。英語多読は、日常的に英語を使用する場面が少ない環境においても継続的に英語に触れる機会を提供することが可能である。また個人のレベルに合わせた本を用いて、個人のペースで読み進めることが可能であることから、レベル差のある学生に対応できる教育手法である。

言語習得の観点からKrashen (1985) がインプット仮説 (Input Hypothesis) を提唱し、理解可能なインプットを可能にする内容把握を中心とした多読の重要性を主張している²⁾。単語の認知的処理の観点から門田・野呂 (2001) は、速く正確な自動的単語認知力を養うには多くの活字に触れる機会を与える多読が最も効果的な方法であり、活字に音声があれば単語の認知処理が促進されると指摘している³⁾。動機付けの観点からDay & Bamford (1998) が多読ブックストラップ仮説 (Extensive Reading Bookstrap Hypothesis) を提唱し、第二言語で読むことがうまくできたとすれば、学習者は多読はやりがいがあり楽しいものだと言見すると想定され、第二言語で積極的に読む態度を育成し、学習に対する動機付けが高まると主張している⁴⁾。

本校では平成20年度に「自律的英文多読活動実践」が学内重点施策経費に採択されたのを機に「英語多読プロジェクト」を始動させ、英語多読図書の整備と授業での実践を行うこととなった。本プロジェクトは英語多読の実践と研究を重ねながら学生の英語力の向上と自律的な英語学習習慣の確立をめざしたカリキュラム開発を目的とし、学生が達成すべき目標として3年生ままでに50万語、本科卒業時までに100万語を読み、TOEICテストで400点以上取ることを設定した。

英語多読図書は英語科教員が選定し、図書館の協力を得て読みやすさレベル (YL) と総語数のラベリングを行っている。平成20年度以前は約180冊程度の英語多読図書を所蔵していたが、平成20年度に学内重点施策経費で約2,700冊、平成21年度に学内重点施策経費と高専機構特別教育研究経費で約3,200冊を購入し、以降は学内配分経費のうち図書館の経費から年間に10万円分を当てて教材の整備を継続している。英語多読図書の蔵書数は現時点で7,547冊となっている。

本校で採用する英語多読の方法は、易しい本から

徐々にレベルを上げていくSSS (Start with Simple Stories) 多読学習法である⁵⁾。「辞書を引かない」「わからないところは飛ばす」「つまらなくなったらやめる」を三原則とし、教師は「教えない」「押し付けない」「テストしない」を基本方針として読書指導を行っている⁶⁾。

平成26年度に実施した、本校における英語多読の読書量とTOEIC Bridge テストスコアの相関に関する調査では、両者に相関を結論付けることは難しいという結果となった⁷⁾。これは、1) 学習者の中には読書量は少なくともスコアの高い学生、あるいはスコアは低いけど読書量が多い学生がいる、2) 学習者の英語多読における絶対的な読書量が不足している、という2つの要因によるところが大きいと考えられる。導入時からの指導方針として、大まかなレベル指定や読むべき冊数を指定することはあるものの、基本的に学習者の自主性を尊重してきた。読み方については先述の三原則を基本に、日本語に訳さず読むことを指導し、意味がわからない、あるいは理解できない表現がある場合の対処法は学習者のやり方にまかせてきた。一方で、平成26年度の調査では、英語多読における読書量が多い学生について、TOEIC Bridge テストスコアの伸び率が大きい傾向にあるという結果が得られた。そこで、成績上位者の読み方に何らかの特徴があるのではないかと考え、学習者に対して「読み方」に関する調査を実施することとした。

3. 読みに関する調査

英文の読み方に関する調査は、記名式のアンケート形式により平成26年2月に本校1～3年生を対象として実施した。質問項目と回答の選択肢は以下のとおりである。

項目1 あなたは授業で英語多読の本を、普段からよく読んでいますか。
ア) よく読んでいる イ) わりと読んでいる ウ) どちらともいえない エ) あまり読んでいない オ) ほとんど読んでいない

項目2 あなたは授業で英語多読を行うときに、どのように本を選んでいきますか。もっともあてはまるものを1に、次にあてはまるものを2に記入してください。

ア) 本のシールの色 (読みやすさレベル) で選ぶ

イ) 本のシリーズから選ぶ ウ) 本のジャンルで選ぶ エ) 本のタイトルで選ぶ オ) 本の挿絵で選ぶ カ) 本の厚さ（薄さ）で選ぶ キ) 図書館で手に取りやすい位置にあった本を選ぶ ク) その他

項目3 英語多読の本を読んでいる、意味がわからない単語が出てきたときにあなたはどのようにしますか。自分が行う行動を次から選び、順番に記号を記入してください。2や3がない場合は空欄でかまいません。

ア) 挿絵から意味を推測する イ) 単語の語形から推測する ウ) 前後の文脈から意味を推測する エ) 品詞から意味を推測する オ) 似ている語から意味を推測する カ) 気にせず先を読む キ) こっそり辞書で調べる ク) その他

項目4 英語多読の本を読んでいる、理解できない英文が出てきたときにあなたはどのようにしますか。自分が行う行動を次から選び、順番に記号を記入してください。2や3がない場合は空欄でかまいません。

ア) 挿絵から内容を推測する イ) 単語の日本語訳から内容を推測する ウ) 前後の文脈から内容を推測する エ) 英文の構造を分析する オ) スラッシュで分けて考える カ) 気にせず先を読む キ) その他

調査では平成26年4月に学内で実施したTOEIC Bridge IPテストを受験している学生を分析の対象とし、学年別の分析の他に、TOEIC Bridgeテストスコアによる成績別の分析も行った。今回は英文の読み方に関する調査であることから、TOEIC BridgeテストのうちReading テストのスコアを用いることとし、学生の得点分布状況から66点を上位グループ、46点～64点を中位グループ、46点未満を下位グループとした。

3. 1 項目1の結果

項目1では、ア) 「よく読んでいる」とイ) 「わりと読んでいる」を合わせると、2年生でそのように答える学生が多い。これは本校のカリキュラムによる影響が大きいと考えられる。英語多読を1年生は英語読解クラス（2単位）の中で実施し、2年生は同（3単位）で実施、3単位のうち1単位で主として英語多読を行うよう設定している。3年生では同科目が再び2単位に戻るため、十分な多読時間を授業内で確保することが難しいことが要因として考えられる。一方で同じ項目への回答を成績別にみると、成

績上位者の回答ではア) 「よく読んでいる」とイ) 「わりと読んでいる」と答える割合が高くなっており、「読んでいる」という意識の高さが成績と関連しているといえる。

【全体】 n=597

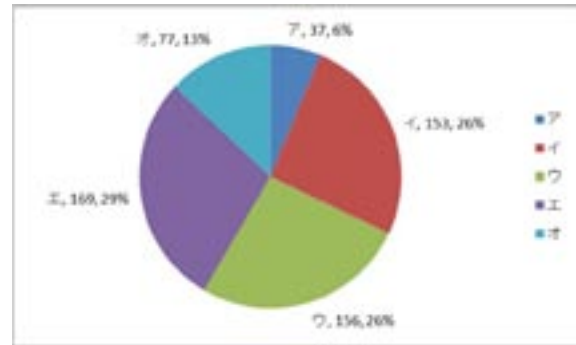


図-1 アンケート結果：項目1 全体の回答

【1年生】 n=202

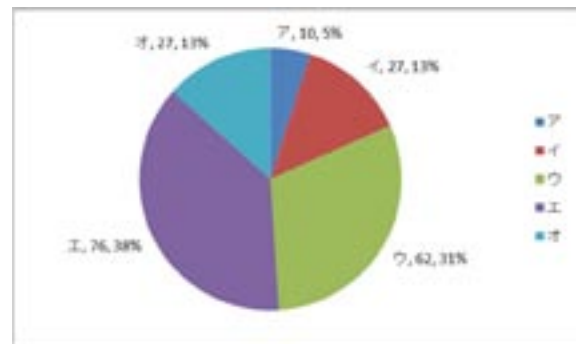


図-2 アンケート結果：項目1 1年生の回答

【2年生】 n=194

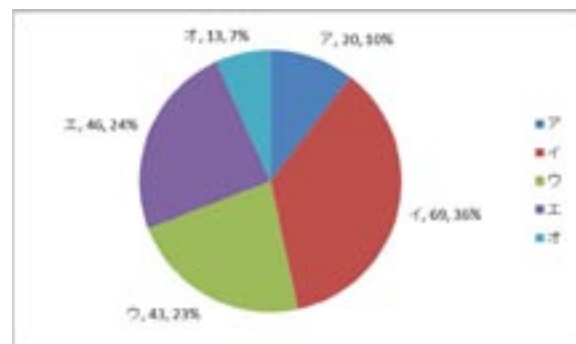


図-3 アンケート結果：項目1 2年生の回答

【3年生】 n=201

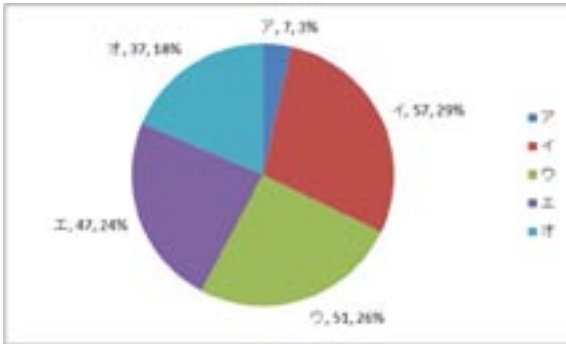


図-4 アンケート結果：項目1 3年生の回答

【上位】 n=109

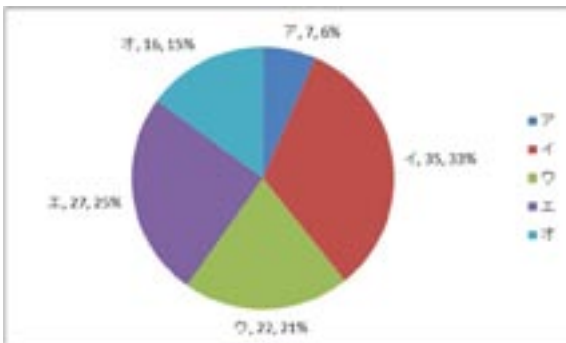


図-5 アンケート結果：項目1 成績上位者の回答

【中位】 n=282

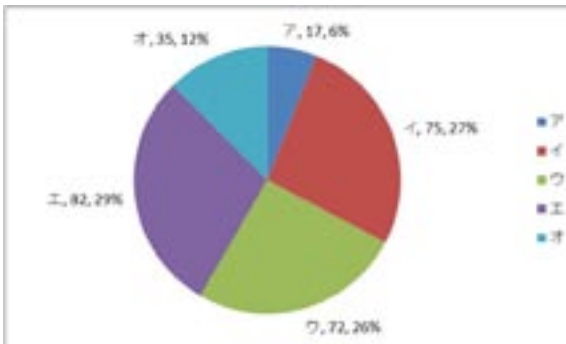


図-6 アンケート結果：項目1 成績中位者の回答

【下位】 n=206

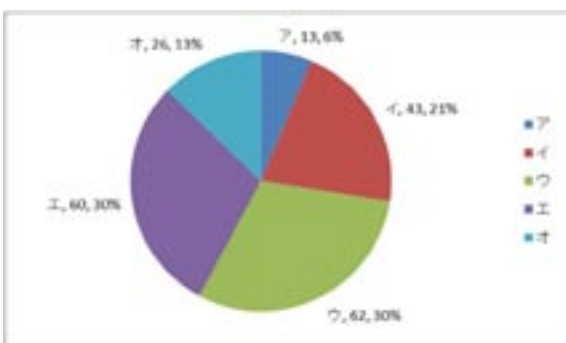


図-7 アンケート結果：項目1 成績下位者の回答

3. 2 項目2の結果

項目2は本の選び方に関する質問である。全体として1) 指定されたレベルの中で、2) お気に入り、あるいはよく読むシリーズから、本を選ぶ学生が多いと分析できる。本の選び方に関しては、成績による違いはあまり大きくないが、学年が進行するに従い選び方が多様化する傾向があるといえる。

【全体】1 n=597

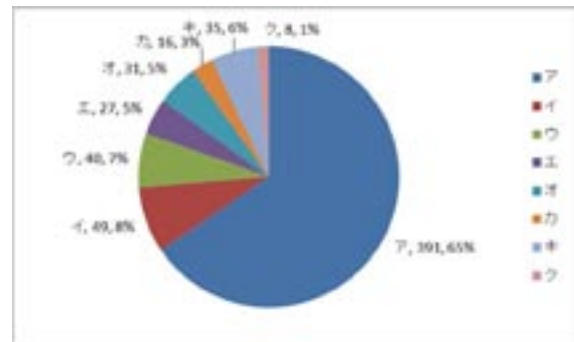


図-8 アンケート結果：項目2の1 全体の回答

【全体】2 n=588

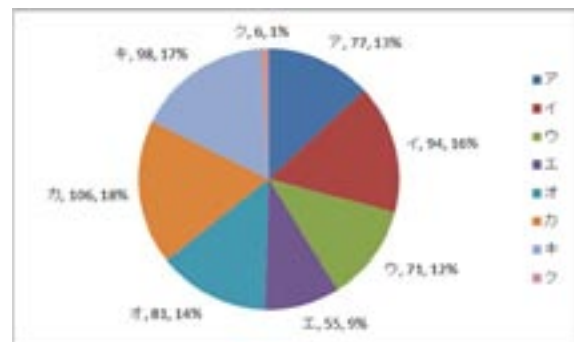


図-9 アンケート結果：項目2の2 全体の回答

【1年生】1 n=202

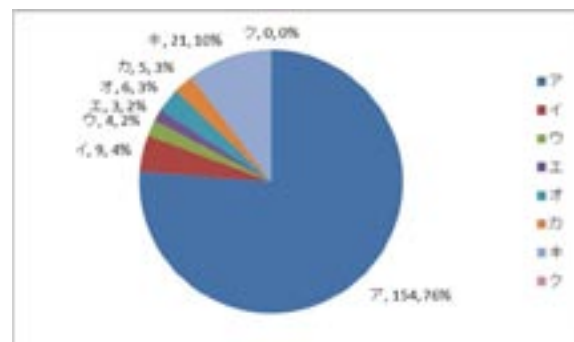


図-10 アンケート結果：項目2の1 1年生の回答

【2年生】1 n=194

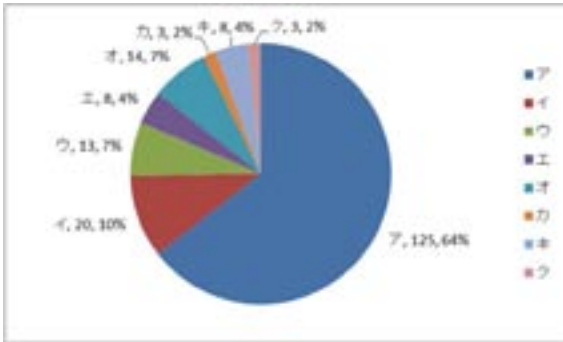


図-11 アンケート結果：項目2の1 2年生の回答

【3年生】2 n=196

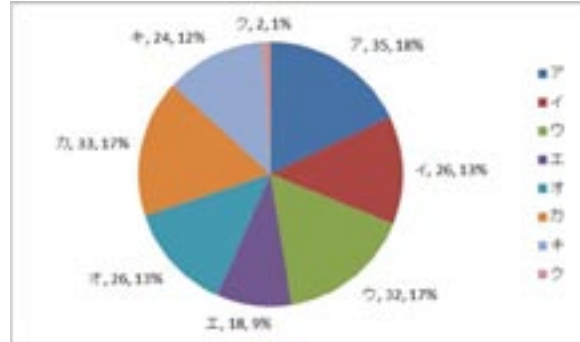


図-15 アンケート結果：項目2の2 3年生の回答

【3年生】1 n=201

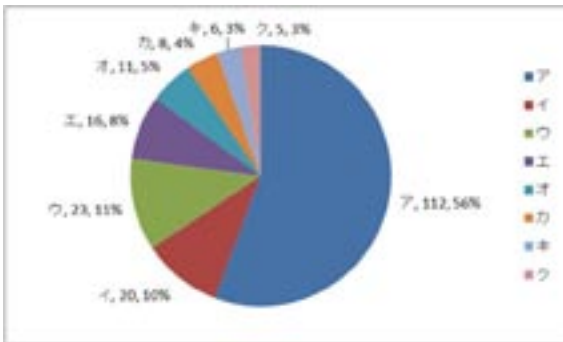


図-12 アンケート結果：項目2の1 3年生の回答

【上位】1 n=109

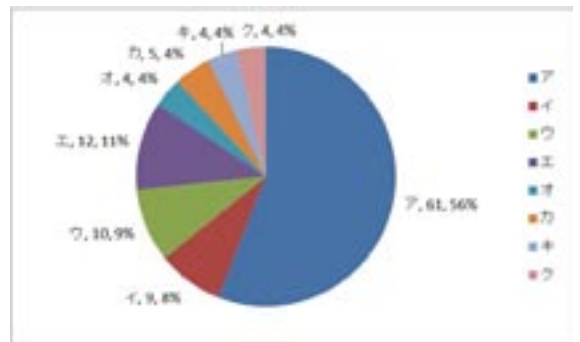


図-16 アンケート結果：項目2の1 成績上位者の回答

【1年生】2 n=201

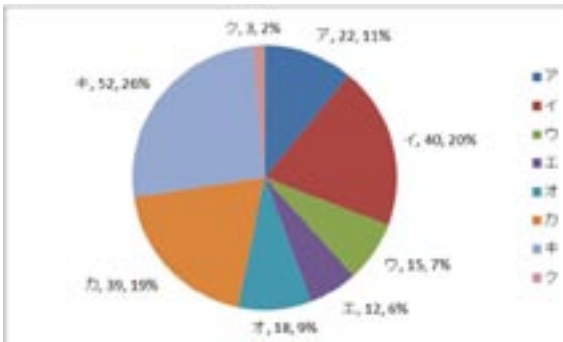


図-13 アンケート結果：項目2の2 1年生の回答

【中位】1 n=282

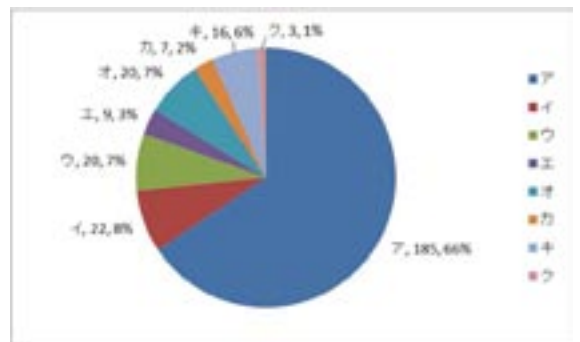


図-17 アンケート結果：項目2の1 成績中位者の回答

【2年生】2 n=191

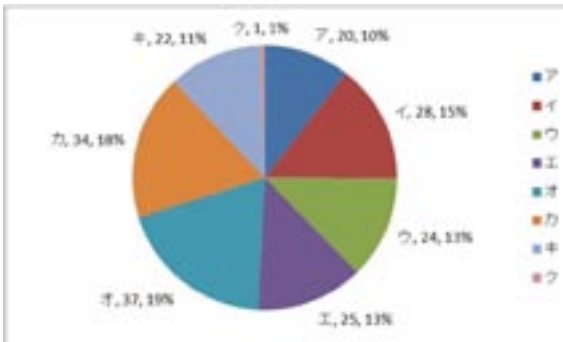


図-14 アンケート結果：項目2の2 2年生の回答

【下位】1 n=206

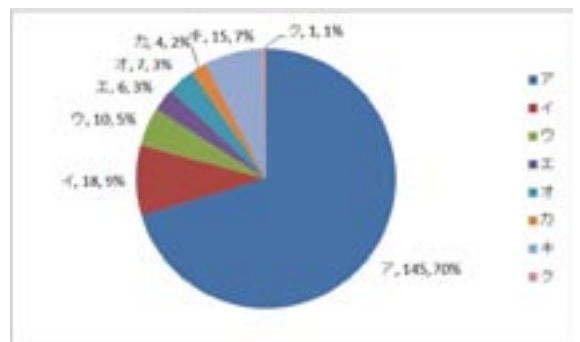


図-18 アンケート結果：項目2の1 成績下位者の回答

【上位】2 n=106

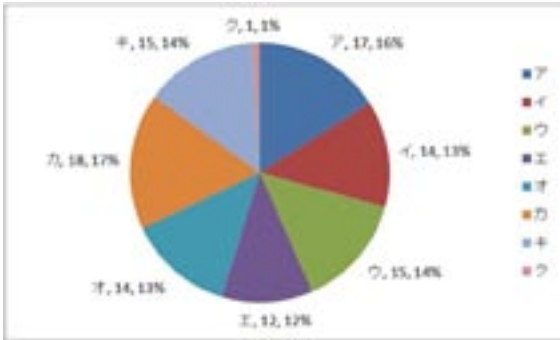


図-19 アンケート結果：項目2の2 成績上位者の回答

【中位】2 n=278

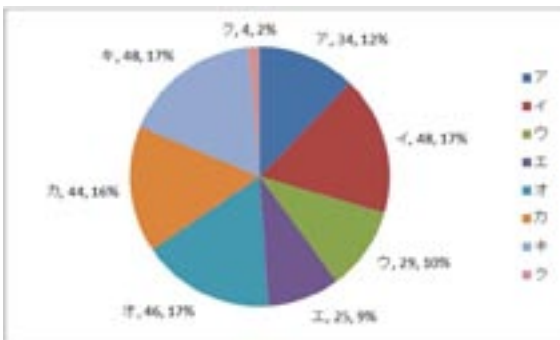


図-20 アンケート結果：項目2の2 成績中位者の回答

【下位】2 n=204

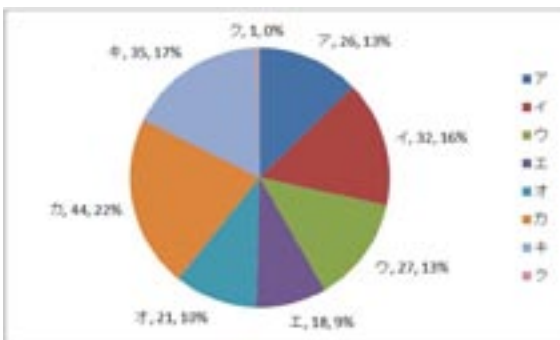


図-21 アンケート結果：項目2の2 成績下位者の回答

推測する」→カ) 「気にせず先を読む」と回答する学習者が最も多かった。カ) 「気にせず先を読む」が多くの回答に表われるが、このことに関しては本校の指導方針である「わからないところは飛ばす」という読み方が学習者に定着していると考えることができる。

【全体】 n=597

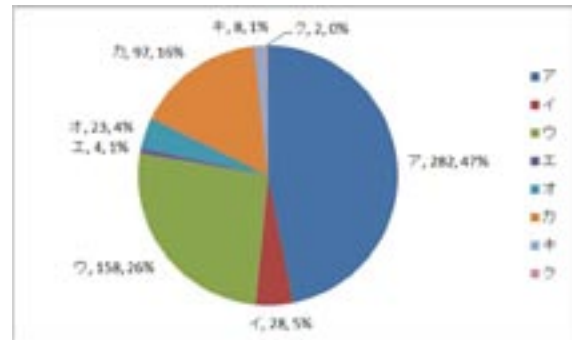


図-22 アンケート結果：項目3 全体の回答

表-1 アンケート結果：項目3 全体の回答

最多	ア→ウ→カ	93
2位	ウ→ア→カ	48
3位	カ	45

【1年生】 n=202

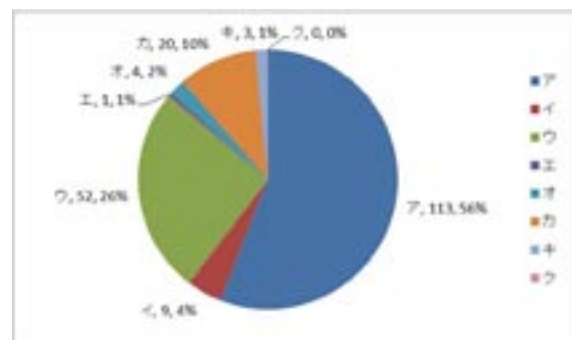


図-23 アンケート結果：項目3 1年生の回答

表-2 アンケート結果：項目3 1年生の回答

最多	ア→ウ→カ	39
2位	ウ→ア→カ	19
3位	ア→カ	10

3. 3 項目3の結果

アンケートの項目3は、単語レベルでの未知の表現に出会った際の対応を問うものである。岩中(2013)は英文を読む際に理解できない表現がある場合、学習者の読み方には「手順」があると指摘していることから⁸⁾、本調査では学習者がどのような手順で対応するのが調査できるように答え方を設定した。

全体として挿絵を手掛かりに推測する学習者が多く、手順としては学年や成績を問わずア) 「挿絵から意味を推測する」→ウ) 「前後の文脈から意味を

【2年生】 n=194

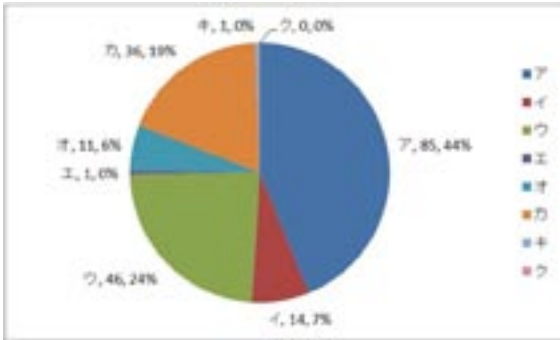


図-24 アンケート結果：項目3 2年生の回答

表-3 アンケート結果：項目3 3年生の回答

最多	ア→ウ→カ	29
2位	カ	17
3位	ウ→ア→カ	11

表-4 アンケート結果：項目3 成績上位者の回答

最多	ア→ウ→カ	11
2位	ウ→ア→カ	11
3位	カ	10

【中位】 n=282

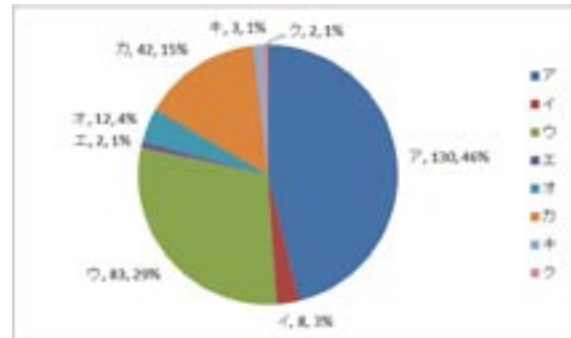


図-27 アンケート結果：項目3 成績中位者の回答

表-5 アンケート結果：項目3 成績中位者の回答

最多	ア→ウ→カ	50
2位	ウ→ア→カ	25
3位	カ	18

【3年生】 n=201

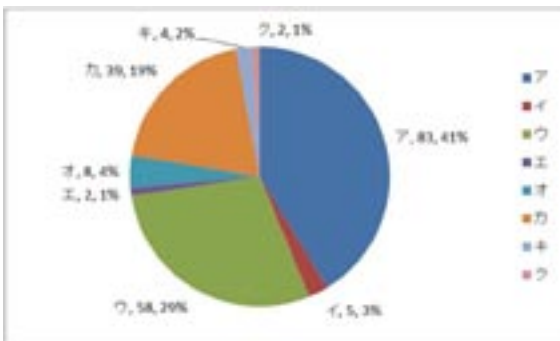


図-25 アンケート結果：項目3 3年生の回答

表-3 アンケート結果：項目3 3年生の回答

最多	ア→ウ→カ	25
2位	カ	20
3位	ウ→ア→カ	18

【下位】 n=206

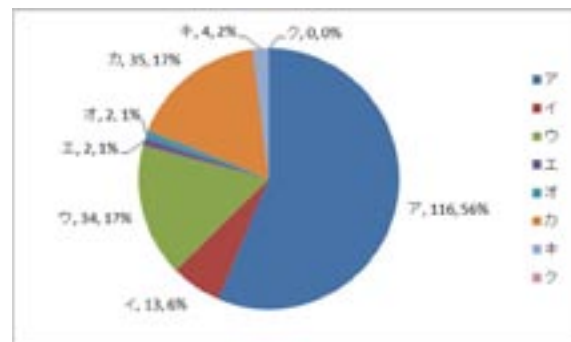


図-28 アンケート結果：項目3 成績下位者の回答

表-6 アンケート結果：項目3 成績下位者の回答

最多	ア→ウ→カ	32
2位	カ	17
3位	ア→カ	13

【上位】 n=109

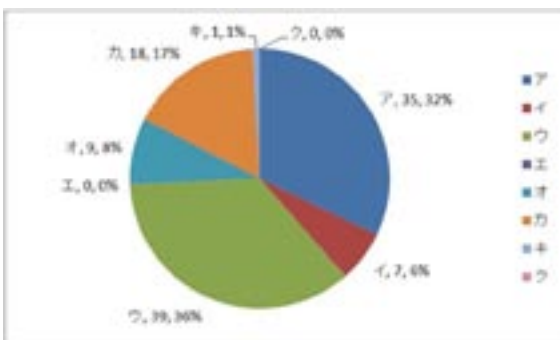


図-26 アンケート結果：項目3 成績上位者の回答

3. 4 項目4の結果

項目4は文レベルで未知の表現に遭遇した場合の対処法をきく質問である。こちらについても項目3と同様に、学年や成績層を問わずア)「挿絵から内容を推測する」→ウ)「前後の文脈から内容を推測する」→カ)「気にせず先を読む」と答える学習者

が多かった。英語読解の授業では英文を区切って読むスラッシュリーディング方式によるアプローチを指導しているが、項目4の質問に対してエ)「英文の構造を分析する」、オ)「スラッシュで分けて考える」と答える学生は少なく、精読的なアプローチをする学生はほとんどいない、あるいはそのようなアプローチを意識的に行っている学生はほとんどいないと考えられる。

【全体】 n=597

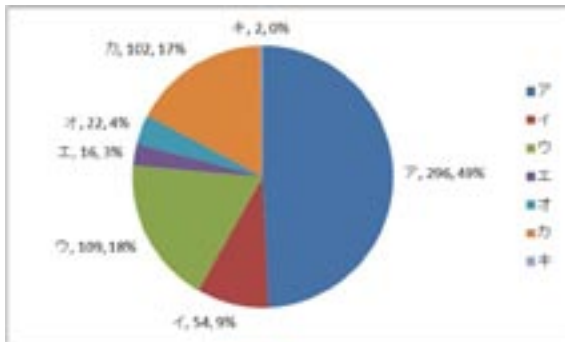


図-29 アンケート結果：項目4 全体の回答

表-7 アンケート結果：項目4 全体の回答

最多	ア→ウ→カ	89
2位	カ	59
3位	ウ→ア→カ	29

【1年生】 n=202

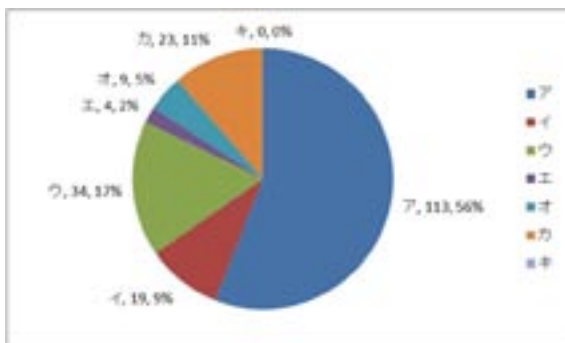


図-30 アンケート結果：項目4 1年生の回答

表-8 アンケート結果：項目4 1年生の回答

最多	ア→ウ→カ	36
2位	カ	14
3位	ア→ウ→イ	13

【2年生】 n=194

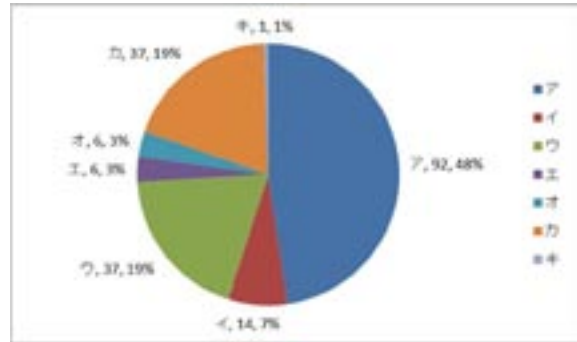


図-31 アンケート結果：項目4 2年生の回答

表-9 アンケート結果：項目4 2年生の回答

最多	ア→ウ→カ	20
2位	カ	20
3位	ア	10

【3年生】 n=201

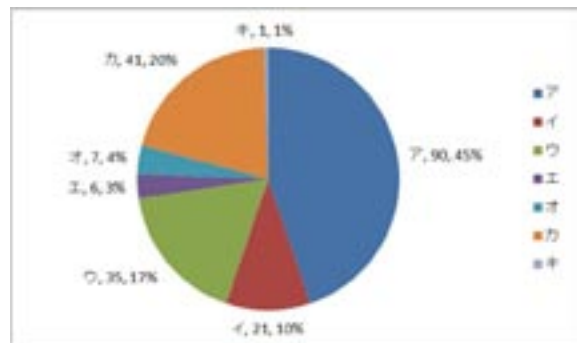


図-32 アンケート結果：項目4 3年生の回答

表-10 アンケート結果：項目4 3年生の回答

最多	ア→ウ→カ	33
2位	カ	24
3位	ア→イ→ウ	13

【上位】 n=109

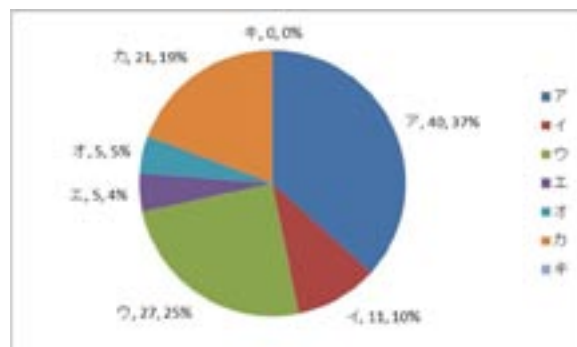


図-33 アンケート結果：項目4 成績上位者の回答

表-11 アンケート結果：項目4 成績上位者の回答

最多	ア→ウ→カ	15
2位	カ	12
3位	ウ→ア→イ	5

【中位】 n=282

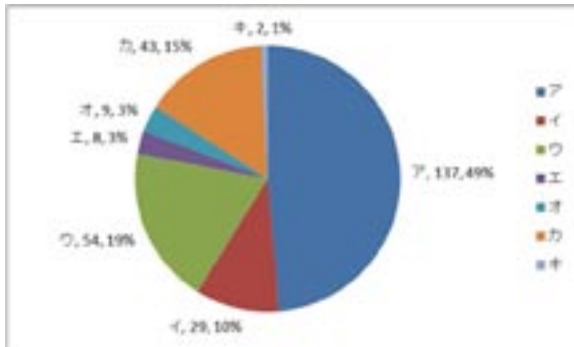


図-34 アンケート結果：項目4 成績中位者の回答

表-12 アンケート結果：項目4 成績中位者の回答

最多	ア→ウ→カ	48
2位	カ	26
3位	ウ→ア→カ	16

【下位】 n=206

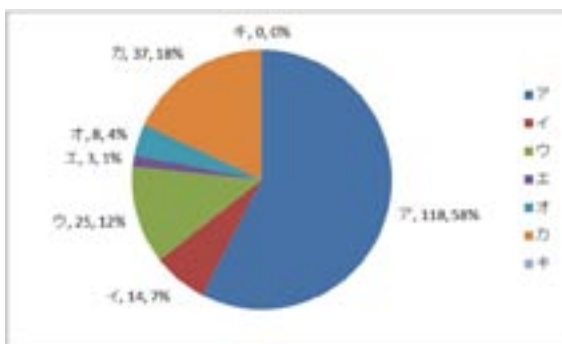


図-35 アンケート結果：項目4 成績下位者の回答

表-13 アンケート結果：項目4 成績下位者の回答

最多	ア→ウ→カ	26
2位	カ	20
3位	ア→ウ→イ	14
3位	ア→カ	14

4. 調査結果から

学習者において、単語レベルおよび文レベルで未知の表現に遭遇した場合に「気にせず先を読む」と

いう対応をする割合は、学年が進むほど多くなっている。英語多読に慣れ、多少わからなくても気にせず読めるようになる一方で、読み方がいい加減になる、理解できないことに慣れてしまっているとも考えることができる。成績上位者では「気にせず先を読む」と回答する割合が低く、何とか周辺の表現を手掛かりに理解しようとしている状況が推測される。このような「読み」や理解に対するアプローチの違い、あるいは積極性の違いが、TOEIC Bridgeテストスコアに、そして英語力の向上に影響を与えているのではないだろうか。

5. 今後の課題

本校における英語多読の課題は、読書量の確保である。また、安定的に英語多読を継続できる環境作りも必要であると考えられる。そこで、平成27年度より英語多読を科目として独立させ、1～3年生で各1単位ずつ履修するようカリキュラムを変更した。西澤・吉岡・伊藤(2010)は、学習者が「やさしい英文ならば読める」と実感するためには30万～50万語以上の読書量が必要であると述べており⁹⁾、本校でも4年生になるまでにこの読書量を確保できるようカリキュラム設計を行った。今後はどの程度の学生が目標とした読書量を確保できるのかに注視しながら、読書量が確保できた状態でのTOEIC Bridgeテストスコアとの相関分析や、今回と同様の英文の読み方に関する調査を継続し、経年的な変化の状況について検討を行いたい。

謝辞：本校における英語多読活動は、田中真由美先生（現信州大学）に多大なるご尽力をいただきました。また、自見壽史先生（現聖徳大学）、木村博子先生（現目白大学）にもご協力をいただきました。記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 田中真由美, 大湊佳宏, 土田泰子: 長岡高専における英語多読実践プロジェクト(その1), 長岡工業高等専門学校研究紀要, 第45巻 第2号, pp.19-24, 2009.
- 2) Krashen, S. D. 1985. *The input hypothesis: Issues and implications*. Longman.
- 3) 門田修平, 野呂忠司(編著) 2001. 『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版.
- 4) Day, R. R. & Bamford, J. 1998. *Extensive reading in the*

second language classroom. Cambridge University Press.

Dayらは、ある行為がより迅速かつより少ない労力でより多くの結果をもたらすような処理を意味する

「bootstrap」は工学等で用いられる概念であるが、これを多読に応用して「bookstrap」という造語を著書の中で提案している。

- 5) 酒井邦秀, 神田みなみ (編著) 2005. 『教室で読む英語 100万語—多読授業のすすめ』大修館書店.
- 6) 高瀬敦子 2010. 『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店.
- 7) 土田泰子, 大湊佳宏, 占部昌蔵, 大森理聡, 米崎啓和,

市村勝己: 長岡高専における英語多読実践と教育効果に関する研究, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集, 第34号, pp.39-48, 2015.

- 8) 岩中貴裕 2013. 「英語学習における多読と精読の役割」『Persica』第40号.
- 9) 西澤一, 吉岡貴芳, 伊藤和晃 2010. 「工学系学生の苦手意識を克服し自律学習へ導く英語多読授業」『工学教育』第58巻3号.

(2015. 10. 2 受付)